

私、履歴書

もり はな え
森 英 恵

③

なだれ、柿が色づき、山は紅葉して燃えるような色になった。そして冬霜柱が立ち、雪が降り、軒からツラツラが下がつてとつても寒い。こんな季節の移り変わりがはつきりした自然が、私の人生の出発点にであった。

家の裏庭の向こうは田んぼだった。その先には川が流れ、木の橋がかかっていた。さらに向こうには、山と青い空が広がっていた。

幼い日にその姿を追って遊んだ蝶々の思い出である。私は一九二六年一月八日、島根県の長女は初めての女の子ということ

私は、男二人、女三人の五人きょうだいで四番目に生まれた。五つ上の長女は初めての女の子ということ

幼い日 田んぼにはいま時分の季節には、れんげの花がいつせいに咲いた。あたり一面を赤紫に染め上げるれんげの花には、無数の紋白蝶が、ひらひらと舞っていた。

島根の自然に戯れる

思い出がデザインのルーツ

ふとしたおりに思い起こすふるさとの風景は、こんな色彩豊かなみずみずしいたすまいだ。とりわけ、れんげの花の色と紋白蝶は、いつまでもまっ先に目に浮かぶ。初めてのニューヨークコレクション以来、すっかり私のトレードマークになってしまった蝶のデザインのルーツも、

の六日市町で生まれた。津和野から汽車やバスを乗り継いでさらに内陸に入った、中国山脈に囲まれた小さな町である。

で珍重され、何かとこまわられて育った。たよだが、私は二人目だった。すくなく二つ下に妹ができたこともあって、別離は早かった。

よく運動靴をはいて野山を駆け巡った。あせ道に沿って流れる小川でメダカをすくったり、フナをみつけて追いかけたり……。初夏になると田んぼではカエルがいつせいに鳴いた。やがて秋、柿の穂が黄金色にうつ

あまり手をかけられなかった分、自立心も早く育ち、一人で遊ぶことが苦にならなかった。一歩引いたところから客観的に物を見つめる習慣は、そのころから身につけていったと思う。

父は医者でとても教育熱心だった。子供の頃(しつけ)にはとりわけ厳しく、あいきつの方、言葉の使い方から、はしの持ち方まで徹底的に教え込まれた。特に二人の兄は質実剛健に育てられた。

私も父の問いかけに、ぐずぐず黙っている。「返事ははっきりのハイと答えなさい」ときつくしかられたこと

学校時代の友達には「えいけい」と呼ばれたこともあったし、小学校のころも、しょっちゅう「なんて脱び」のど名前の読み方を尋ねられたものだ。だからたいいの場合は実家の姓である「藤井さん」で通っていた。



筆者の11ヵ月後生

母は優しく、厳格でがんばるの母だった。母の染しめはおいしい料理をつくって家族にふるまうこと。田舎では数少ない医者のお家だったから、患者さんから野山の幸が季節ごとに届いた。キンやウサギ、ヤマメ

強い父と優しい母。昔の典型的な親たちだった。しかし父には、人と際立って違うところがあった。田舎にあって、人並はずれて、おしやれ

だったのである。

た。やがて秋、柿の穂が黄金色にうつ

た。やがて秋、柿の穂が黄金色にうつ

た。やがて秋、柿の穂が黄金色にうつ

た。やがて秋、柿の穂が黄金色にうつ

た。やがて秋、柿の穂が黄金色にうつ

た。やがて秋、柿の穂が黄金色にうつ